

自閉症児の各領域・教科における「過ごしにくさ」に関する考察

～ 自閉症児に関わる養護学校教員の意識調査を通して ～

森井 博之*・坂本 学*・井上 泰之*・石倉 裕晃*・姉崎 弘**

近年、自閉症児に対する指導の成果が問い直されており、指導方法の開発が進められている。ただ、現時点で自閉症児は知的障害養護学校に在籍し、その教育課程に基づいた指導をうけており、成果を問い直すには、現行の指導の中で課題を明らかにする必要がある。そこで本研究では、知的障害養護学校における各領域・教科において、自閉症児が示す「過ごしにくさ」の整理を試みた。具体的には、彼らの「過ごしにくさ」に関して、教員にアンケート調査を実施し、各領域・教科ごとの傾向を抽出、分析した。その結果、「美術」「生活単元学習」「全校集会」において、「過ごしにくさ」が顕著に認められ、その理由として「対人関係の困難さ」「興味・関心の幅の狭さ」が想定された。また、解消方法として「活動への見通しが持てる情報提供」「学習環境の構造化」などが考えられた。今後の課題として、自閉症児に見られる各領域・教科ごとの「過ごしにくさ」の整理を継続し、授業に活かしていけるようにすることがあげられた。

キーワード：自閉症児、知的障害養護学校、領域・教科、意識調査

1 はじめに

文部科学省「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）」に見られるように、全国的に自閉症児に対する従来の指導の成果が問い直されている。この流れを受けて、自閉症児に特化した教育内容を研究している学校がある。

鳴門教育大学附属養護学校では、自閉症の指導プログラムの開発として、彼らのかたよった社会性の発達に着目して自立活動の見直しに取り組んでいる。現行の5区分22項目をもとに自閉症の特性を再整理し、「社会との関わり」を加えた6区分13項目を提案している。ルール理解や人との関わりなどを指導事項に盛り込んでいる。筑波大学附属久里浜養護学校では自閉症児の指導に特化した養護学校という位置づけで、彼らの障害特性を反映させた課題学習や自立活動の内容を検討している。自閉症児に対する個別の課題学習における“配慮点”の抽出や、自立活動における新区分「社会的適応」「自律的活動」の導入に取り組んでいる。

三重大大学教育学部附属養護学校においても在籍者の6割以上を自閉症児が占めており、今後も増加が予測される。そこで「自閉症児の指導の専門性」の向上をかね、その専門性を学校生活の中での「過ごしにくさ」の軽減ととらえることから着手した。自閉症児の障害特性から彼らの学校生活における「過ごしにくさ」は様々な想定され、その解消方法にも様々なアプローチが考えられよう。本研究では、まず知的障害養護学校である本校の教

育課程の範囲内でその「過ごしにくさ」を解消することを考えた。具体的には本校の教育課程に沿って、各々の領域・教科ごとに認められる「過ごしにくさ」を抽出することを考えた。

わたしたち教員が領域・教科ごとに自閉症児の「過ごしにくさ」を見出そうとすると、それを実感するのは、授業場面での指導に対して彼らが活動への不適応という「過ごしにくさ」のサインを示すときではないだろうか。彼らがそのサインを出すとき、わたしたちは自閉症児に対する「指導のしにくさ」を実感するのではないだろうか。そこで今回は、自閉症児の「過ごしにくさ」を解釈するにあたって、教員の「指導のしにくさ」から考えることにした。

本校でも以前から自閉症児に対する「指導のしにくさ」についての指摘はあった。それは美術や生活単元学習などで顕著に指摘されてきた。見本を見せるとそのイメージにとらわれてしまう美術や話し合い活動を中心にしたような生活単元学習では、「指導に乗りにくい」という意味で確かに強く感じられたのであろう。これは自閉症児の特性を考えれば当然の結果とも考えられる。しかしながらわたしたちは日々の授業で、自閉症児の特性をかみ砕いて理解すると同時に「指導のしにくさ」を解消していく必要がある。

2 目的

本研究では、自閉症児の学校生活における「過ごしにくさ」を解消するにあたって、まず教員の「指導のしに

* 三重大学教育学部附属養護学校

*** 三重大学教育学部障害児教育講座

くさ」を抽出する。その上で知的障害養護学校における各々の領域・教科ごとに、自閉症児の「過ごしにくさ」として分析・整理し、有効な改善方法についての指針を得ることとする。

3 方法

日頃からわたしたちが実感している自閉症児に対する「指導のしにくさ」を、あらためて領域・教科の枠で整理することを考え、三重大学教育学部附属養護学校教員（全29名：小学部9名、中学部9名、高等部11名）を対象にアンケート調査を実施した。

アンケートは以下のように、本校で実施されている各々の教科・領域について「指導のしにくさ」を〈感じる〉〈やや感じる〉〈あまり感じない〉〈感じない〉の4件法で回答する形式とした。また〈感じる〉〈やや感じる〉に回答した場合は、その理由を自閉症の特性としてあげた5つの選択肢（☐内に示す）から選択する形式とした。以下に質問項目を示す。

分析の観点としてライフステージ別の特徴を把握するために「学部別」を、自閉症児の指導経験の浅い教員と豊富な教員の意識の違いを把握するために「自閉症児の指導経験年数別」を、それぞれ設定した。

回収結果は各領域・教科における「教えにくさ」として抽出する。

その上で各教科・領域に特有で、自閉症児に顕著だと考えられる「過ごしにくさ」を導きだし、その解消に必要な配慮事項を考察する。

4 結果

回答結果を「教員全体」「自閉症児の指導経験年数別」「学部別」の観点で整理した。以下に項目別に認められる傾向をあげる。

教科：「音楽」「美術」「体育」の指導のしにくさ

教員全体で〈感じる〉〈やや感じる〉という「指導のしにくさ」に回答したのは、音楽で5割、美術で9割、体育で6割という結果になった。

経験年数別の傾向は3教科とも類似しており、経験が増すにつれて〈あまり感じない〉〈感じない〉の割合が高くなる結果であった。

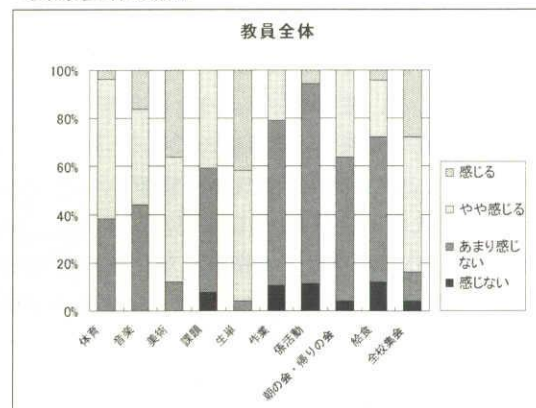
調査の実施前から教員が感じていた「美術は指導しにくい」という印象がここでも明らかになった。その理由としてほとんどの教員が「興味の範囲の狭さ」を選択し

自閉症児に対する指導のしにくさアンケート

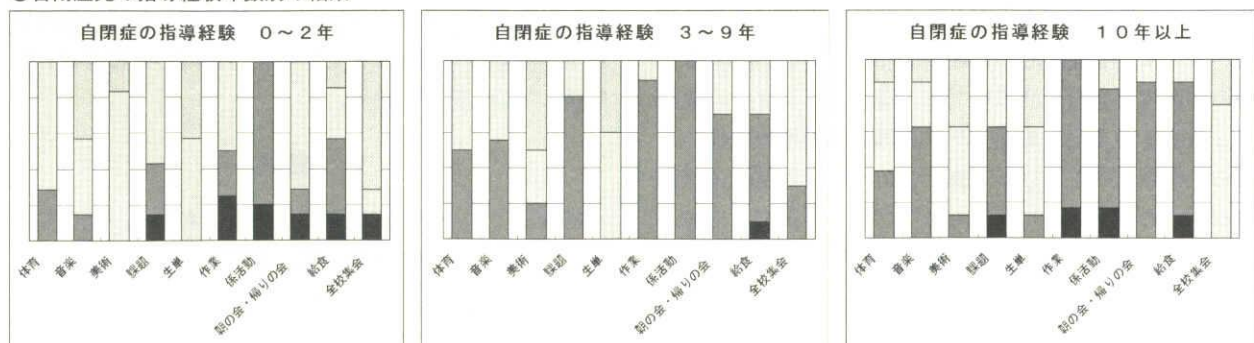
- ①教科：「音楽」「体育」「美術」について指導のしにくさを感じますか？
- ②領域：「課題学習（自立活動）」「全校集会」について指導のしにくさを感じますか？
- ③領域・教科を合わせた指導：「生活単元学習」「作業学習」「係活動」「朝の会／帰りの会」「給食」について指導のしにくさを感じますか？
- ④上記の教科・領域における指導のしにくさの原因に以下のものが該当しますか？

- ・言葉の遅れ
- ・対人関係の困難さ
- ・興味の範囲の狭さ
- ・変化に対する抵抗
- ・アンバランスな感覚

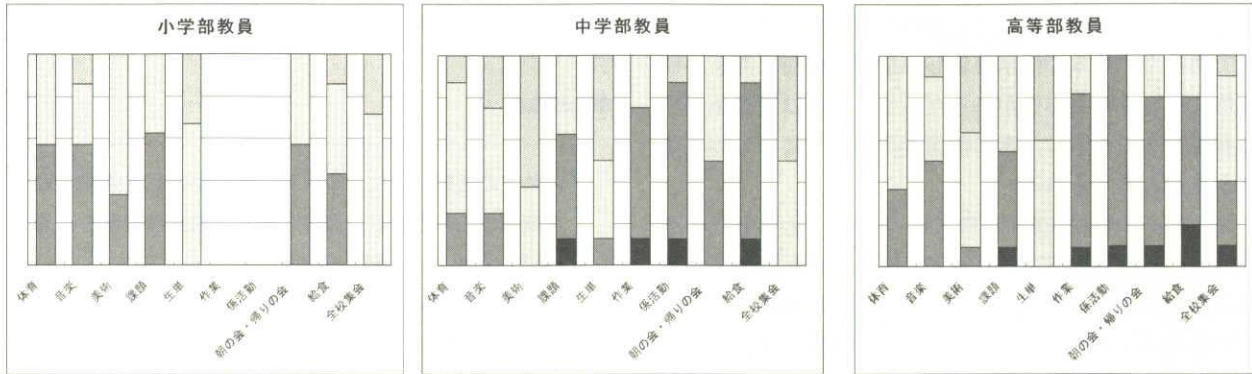
●教員全体の結果



●自閉症児の指導経験年数別の結果



●学部別の結果



ており、題材選びに多くの教員が苦勞していることが推測された。

領域：「課題学習（自立活動）」「全校集会」の指導のしにくさ

教員全体で「指導のしにくさ」に回答したのは、課題学習（自立活動）で3割、全校集会で9割であった。両者ともに学部別、経験年数別の差がほとんど認めらず、同様の傾向を示す結果であった。

全校集会については指導のしにくさの理由として「対人関係の困難さ」「変化への抵抗」に多くの教員が回答しており、集団活動の苦手な自閉症児に対して教員が指導のしにくさを感じていることが推測された。

課題学習（自立活動）は基本的に2、3名までの少人数で授業を進めており、個別的な配慮ができていたため指導のしにくさを感じにくいということであろう。一方、全校集会は大きな集団であること、見通しの持ちにくいことなど、参加しにくい状況が認められることによると考えられる。

領域・教科をあわせて指導：「生活単元学習」「作業学習」「係活動」「朝の会／帰りの会」「給食」の指導のしにくさ

教員全体で「指導のしにくさ」に回答したのは生活単元学習で9割、作業学習で2割、係活動で1割、朝の会／帰りの会で4割、給食で3割であった。

生活単元学習は以前から指導のしにくさが指摘されていたが、その理由として「対人関係」「興味の範囲の狭さ」に多くの教員が回答している。興味・関心から題材作りをはじめることや授業内容に相談活動などを盛り込む必要があることなどが関係していると考えられる。高等部では指導のしにくさが減少しているが、これには生活単元学習の授業時数の少なさ、行事の準備を中心にしたパターン化しやすい学習内容が関係していると考えられる。

作業学習や係活動は指導内容を構造化しやすく、ワークシステムを構成することで見通しを持たせやすいため、指導のしにくさを感じなくてもよいものと思われる。経験年数2年未満の教員の半数が指導のしにくさを感じているが、3年以降になると激減するため、一定期間の経験でコツをつかめているものと思われる。

同様に朝の会／帰りの会や給食は活動の目的がはっきりしていること、毎日のくり返しによってパターン化しやすいことから自閉症児にとってわかりやすいものと考えられる。

5 考察

以上のアンケート結果より、わたしたちが漠然と「指導のしにくさ」を感じていた部分を、あらためて確認することができた。

そこでアンケート結果に基づいて、領域・教科別に考えられる「過ごしにくさ」とそれに対する配慮事項を考察してみたい。

●図工・美術

- ・自閉症児は想像や工夫、完成像のイメージが難しく、見本がないと見通しが持てない場合が多い。しかしながら、図工・美術という教科の特性上、見本の提示は、創造性や工夫を阻害することにつながり、好ましくない。
- ・見通しの持ちにくさは、活動のおもしろさや楽しさ、完成に伴う達成感や成就感にもつながりやすく、結果的に主体的な活動にはつながらない。
- ・見通しが持てても制作意欲には結びつきにくい。興味・関心の幅が狭い自閉症児にとっては、完成が単なる目的になってしまっていて、強迫的に制作を続けてしまう場合が少なくない。あるいは眼前の材料がなくなって次々に進められない状況になると、自分から要求することなく制作が途絶え、離席してしまうことがある。

自閉症児が図工・美術の学習に主体的に参加できるようにするためには、見本や示範が必要になると考えるべきであろう。見本の提示は新しい情報の伝達と考え、積極的に取り入れる必要があるだろう。見本はできあがった状態のものを示し、常に確認できるようにしておくことが有効と考えられる。

また同一の題材を継続的に扱っていくことも有効と考えられる。彼らの本来の創意工夫は、見通しを持てた後にこそ発現すると考えられる。そのためには同一の題材を何回もくり返すことが、学習内容を理解することにつながり、それが興味・関心へとつながっていくものと考えられる。同様の視点として、有名な美術作品の模写などに取り組むことで、オリジナリティのある表現が発現していく可能性も考えられる。

図工・美術を余暇的な楽しみとする自閉症児もあることから、学校における図工・美術の学習が、彼らの豊かな余暇生活につながっていくことを期待したい。

●音楽

- ・活動そのものの音量、一斉指導を中心にした指導形態に起因する集団の騒々しさなど、自閉症児が苦手とする音刺激の多さから不安定になる場合が認められる。

自閉症児の聴覚過敏が「過ごしにくさ」に影響すると想定していたが、アンケートには授業に支障を来すレベルの過敏さが認められなかった。授業においては、音楽室への移動、学習順序のパターン化など、見通しの持ちやすい設定がとりやすいことで、不安なく落ち着いて学習に参加できていると思われる。

音楽に乗って楽しむ様子も多々見られることから、彼らの聴覚過敏が突発的な大音量や特定の種類の音に限られているのではないかとさえ思える。美術同様、音楽鑑賞を趣味とする自閉症児は少なくないため、豊かな余暇生活へのつながりも意識して指導したい。

●体育

- ・運動にぎこちなさを示す自閉症児は少なくない。示範を見ての動作模倣が難しく、身体の動かし方を言葉で説明されてもわかりにくい。
- ・ゲーム性のある種目においては、ルール理解やチームプレーなどを要求されると難しい。

他者の動き（身体の動かし方、場所の移動、順番など）がモデルになるため、すぐに対応できなくても、同一の運動にじっくり取り組んだり、何度もくり返したりすることで何をしたらよいのかが理解されやすい。

運動のぎこちなさは、あくまでも客観的な評価であるため本人の「過ごしにくさ」にはつながりにくいものと

思われる。一方、ゲーム性のある球技などの種目については、ルール理解の難しさから積極的な参加が認めにくい。

●全校集会

- ・大勢での活動ゆえに、予測不可能な騒音や反響音、放送機器の拡声音などの影響があり、聴覚過敏からくる「過ごしにくさ」が認められる。
- ・活動内容が必ずしも一定でなく、生徒が進行することで見通しが持ちにくく、不安を感じて集団から離れてしまう子どもが少なくない。
- ・空調設備が整わない体育館で実施するため、暑さや寒さが顕著で、落ち着けない子がいる。

アンケート結果には「対人関係の困難さ」「変化への抵抗」があげられていたが、コミュニケーションの難しさや興味・関心の幅の狭さなど、集団活動が有する総合的な課題がすべて影響していると推測される。

よって集団参加に伴う不安要素をいかに取り除けるかが具体的な配慮事項になるだろう。集会の進行を可能な限りパターン化し、活動の順番や内容、場所を視覚情報として提示するなど構造化の手法を取り入れたい。

●自立活動（課題学習）

- ・個々の実態に基づいた少人数編成の授業形態をとっているため、個に応じた配慮がしやすく、「過ごしにくさ」は少ない。

個室に移動した後、個別に授業をするため、子どもにとっては落ち着いた環境での学習が可能になる。もちろん学習内容も個々の課題に即したものになっており、取り組みやすい活動になっている。もともと自閉症児にとっての個別的な課題の有効性を指摘する先行研究は多く、本校の課題学習もその形態をとっていることから「過ごしにくさ」にはつながらなかったものといえよう。

ただし、自閉症児に対する自立活動の内容については、今後の検討が必要である。内容をより精選し、例えば彼らの苦手とするコミュニケーションに関する指導などをどのように考えるかが課題になる。

●日常生活の指導

- ・「係活動」は毎日継続される活動であり、放送による合図（タイムキーブ機能）もあり、見通しが持ちやすく、過ごしにくさは認めにくい。
- ・「朝の会」も毎日、ほぼ同じ内容、座席、パターンで進められるため、見通しが持ちやすい。
- ・「給食」は、自閉症児に顕著な感覚の過敏（食感や喉ごし）が影響し、偏食や二度食いが見られる。また「ごちそ

うさまが待てない」「早食い」などの食事のマナーに関する問題がある。

- ・「帰りの会」は、学校生活の最終日課ということがよく理解されており、見通しが持ちやすい。それゆえ着がえがすむと、早く帰りたいが子や下校が遅れると不安定になって下校を催促する子が少なくない。

日常生活の指導は、「着がえ」も含め、いずれも毎日のくり返し指導である。よってそれぞれの内容のパターンを統一して、あまり変化のない設定にすることで見通しが持ちやすく不安な状況にはなりにくい。学習内容に構造化の手法を導入しやすいため、彼らの「過ごしにくさ」を軽減しているものと考えられる。具体的な構造化の例として、「着がえ」では場所と着がえの手順、「朝の会」では役割の順番とスケジュールの視覚的な提示(写真、絵、シンボル、文字カード)などがあげられる。

「給食」については、特に小学部の児童について様々な「過ごしにくさ」が認められる。自閉症児の偏食に対してはこれまでも様々な指摘がなされてきているが、感覚過敏への配慮を前提に指導をするべきであろう。具体的には好きな食材をやや多めに盛りつけたり、冷めた場合は温めたり、あるいは一口だけでも食べるように促したりするなど無理のない指導を進めるべきであろう。いずれにしても楽しい雰囲気の中で様々な食品を口にする経験を重視していきたい。

また、見通しが持てるがゆえの「待てない」という問題については、時間に基づくルールを守る習慣を定着させたい。そのためにも事前の予告と時間に正確な学習活動の運営は不可欠であると考えられる。

●生活単元学習

- ・自閉症児は「生活単元学習の授業に乗りにくい」「盛り上がり」に欠ける」という印象が強い。ワクワクした楽しそうな参加姿勢が認めにくい。
- ・「なぜ取り組んでいるのか?」という活動目的の理解や、話し合い活動における言葉の理解が難しい。結果的に、活動内容が理解できず、遊ばされている、やらされているような姿につながってしまう。
- ・取り上げるテーマが変更した直後は、見通しが持ちにくく変化への抵抗感が認められる。テーマの理解には、言葉も介在するため、その理解に苦労する。

アンケート結果には「対人関係の困難さ」「興味の範囲の狭さ」があげられていたが、生活単元学習は、まさしく、授業内容としてこの両方を強く有している。一般に生活単元学習では子どもたちの興味・関心に基づく主体的な取り組みが重視される。授業が盛り上がり、子どもたちからの様々な発言やアイデア、話し合い活動、積

極的な活動参加という流れで授業が進行していくことをイメージしがちである。しかしながら、自閉症児においては対人関係や言葉の理解の問題から、双方向のやりとりによる授業展開が難しい。

そこで自閉症児の主体性に対するとらえ方をあらためて見直すことが要求されよう。彼らの主体性を「見通しを持って混乱なく淡々と活動する姿」としてとらえなおすのである。彼らの落ち着いた継続的な活動を主体性の発現ととらえれば、例えば話し合い活動への参加を要求しなくても、選択肢を準備した自己選択・自己決定に基づいた学習内容が組織できよう。もちろん題材の選定においても、情報提供に留意することで、その幅は広がるはずである。

彼らの特性に留意した主体性について、まず教員がイメージを変えることが必要であると思われる。

●作業学習

- ・精度を保つための「正しい手順」が厳然と存在するため、曖昧さが少なく、自閉症児には見通しを持って継続しやすい。
- ・作業や労働の意義を理解するのが難しく、自主的なとりくみには発展しにくい。
- ・進路学習においては、様々な情報提供を受けても、自分の進路と結びつけて考えるのが難しい。

生活単元学習とは好対照であるが、作業学習を好きな自閉症児は多い。彼らの授業への参加には「過ごしにくさ」が感じられず、むしろ授業開始前から集合して準備する姿が多く見られる。

これは活動内容が明確で、そこに秩序が存在しているためであり、「何をするのか」「どこまでやるのか」「次に何をするのか」という授業内容そのものが構造化しやすいことによると考えられる。さらに個々の生徒や作業工程にあわせたワークシステムの設定や動作を伴った学習が、自閉症児にとっての見通しの持ちやすさにつながっているであろう。作業学習の持つ内容自体が、自閉症児の特性とマッチしているといえるのではないだろうか。

この他、すべての学校生活に共通する道徳的な内容であるが、これは「他者の気持ちになって考える」という自閉症児にとっては難しい内容が要求される。環境の統制や指導法の工夫のレベルで解消される問題とは考えにくく、子どもの気持ちに任せているだけでは適切な対人態度の獲得にはつながりにくい。そこで「〇〇なときの気持ちは××」といった情報提供を基本とした指導が必要と考えられる。その上で善悪の判断や他児との協力を単純に促すだけでなく、具体的なルールや協力の仕方を

スキルとして指導していくことが必要であると考えられる。

6 今後の課題

ここまで各領域・教科ごとに自閉症児の「過ごしにくさ」を取り上げ、その解消にむけての配慮について考察を進めてきた。また、この他にも感覚の過敏さや変化への柔軟性のなさ、コミュニケーションの難しさが原因で「過ごしにくさ」を感じる自閉症児は少なくないだろう。逆に毎日くり返す内容で、言葉を介さなくても進められる学習内容や、厳然とした順番・秩序のある活動では比較的落ち着いた活動が認められている。

その中で、いずれの領域・教科にも共通すると考えられる「自閉症児に関しての配慮」について、以下にまとめて記載する。

●学習環境を構造化する。

- ・机の向きや並び方を学習内容に応じて変える。
- ・一度定めた着席場所は変更しない。

●視覚的な支援を取り入れる。

- ・写真、絵、シンボル、文字カード
- ・サイン、ジェスチャー、指差し、見本の提示

●障害特性に応じた学習スタイルを確立する。

- ・「何を」「いつまで」「どれだけ」「次に何する」かを常に情報提供し、見通しを持てるようにする。
- ・機械的な記憶を使った活動のパターン化、同じ順序での進行、始まりと終わりの仕方の統一
- ・できるだけ個別的に、小集団で
- ・言葉のみでなく、動作を伴った学習を取り入れる。
- ・一日のがんばりどころ、その授業内でのがんばりどころを指定する。

●その他

- ・大きな声や突然の大きな音を出さないように

本研究では自閉症児の「過ごしにくさ」を解消する第一歩として、領域・教科別に彼らの「過ごしにくさ」を検討してきた。各領域・教科に特有の本質的な「過ごしにくさ」を整理するには至らなかったが、領域・教科の枠組みで自閉症児の「過ごしにくさ」を分析してきたことは、授業に結びつけられるという視点から、教育現場にとっては意義深いことと考える。

今後は、本研究で得られた領域・教科ごとの「指導のしにくさ」と「過ごしにくさ」を分析・整理し、自閉症児の指導に関する課題を明らかにしていきたい。

参考文献

- 1) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議 今後の特別支援教育の在り方について(最終報告) 2004
- 2) 文部科学省 盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説 総則等編 2000
- 3) 文部科学省 盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領解説 各教科、道徳及び特別活動編 2000
- 4) 鳴門教育大学附属養護学校 自閉症の児童生徒のための指導プログラムの開発 2004
- 5) 筑波大学久里浜養護学校 自閉症児教育実践研究協議会 要項 2005
- 6) 自閉症教育推進プロジェクトチーム はじめての自閉症学級 2005 ジアース教育新社
- 7) 朝日新聞厚生文化事業団 自閉症の人たちへの援助システム TEACCHを日本でいかすには 1999
- 8) 朝日新聞厚生文化事業団 自閉症の人たちを支援するという事 2001
- 9) 国立特殊教育総合研究所 自閉症児教育実践ガイドブック 2004 ジアース教育新社
- 10) 国立特殊教育総合研究所 自閉症教育実践ケースブック 2005 ジアース教育新社
- 11) 全国知的障害養護学校長会 自閉症児の教育と支援 2003 東洋館出版社
- 12) 佐々木正美 自閉症療育ハンドブック TEACCH プログラムに学ぶ 1993 学研